

修士学位請求論文要旨  
定時制高校教育の異文化間教育からの捉え直しに関する研究  
— X 高校を事例として —

明治大学大学院国際日本学研究科国際日本学専攻  
多文化共生・異文化間教育研究領域

I 研究の背景と意義・目的

勤労青少年に後期中等教育を受ける機会を保障すべく 1948 年に発足した定時制高校は、1960 年代以降経済成長や高校教育の普及により学校数が大幅に減少し、高校偏差値の最底辺に位置付けられる等変化してきている（片岡栄美 1983）。また、生徒層も質的に変化し、現在の定時制高校に通う生徒の多くは非行・不登校・高校中退・障害・外国籍等多様な背景を抱えている。その多様さについて言及した研究はいくつか存在するが、定時制高校の持つ多様性に主眼を置き、多様性ゆえの学びや教員と生徒の関係性、葛藤等について研究したものは見られない。だが定時制高校を卒業した筆者は、定時制高校の持つ多様性が近年の日本の教育に求められている「多様性を基調とする『自立・協働・創造』（文部科学省 2013）」に通じているのではないかと感じている。そこで本研究では、定時制高校という「多様性のある場でどのような教育が展開され、何が生起し、それがどう生徒の成長につながったのか」に着目し、異文化間教育の観点から定時制高校の教育を再評価することを試みる。

II 研究方法

研究には、多様な生徒層が集まる傾向にあることが指摘されている（柿内真紀・大谷直史・太田美幸 2009）地方都市の多部制定時制高校である X 高校の卒業生と教員を対象としたインタビュー調査を実施した。その後、KJ 法の手法と聞き書きの形式に基づき分析を行った。

【教員のプロフィール】

	C 先生（男性）	D 先生（女性）
年齢、担当教科	60 代、理科担当	30 代、体育担当
インタビュー日時 所要時間	第 1 回：2014 年 1 月 30 日（木） 約 1 時間半 第 2 回：2014 年 8 月 8 日（金） 約 1 時間半	第 1 回：2014 年 3 月 17 日（月） 約 1 時間 第 2 回：2014 年 8 月 11 日（月） 約 30 分
場所	X 高校	X 高校

【卒業生のプロフィール】

	Aさん(女性)	Bさん(男性)
年齢、卒業年	23歳、2009年3月卒業	28歳、2008年3月卒業
現在の所属	民間企業(社会人1年目)	専門学校2年生
入学前	中学時不登校、入学時15歳	全日制高校中退、入学時18歳
インタビュー日時 所要時間	第1回：2013年8月2日(金) 約1時間半 第2回：2013年8月21日(水) 約2時間半 第3回：2014年8月23日(土) 約1時間半	第1回：2013年8月21日(火) 約2時間 第2回：2013年9月18日(水) 約1時間 第3回：2014年8月8日(金) 約1時間半
場所	明治大学中野キャンパス	X高校

Ⅲ・Ⅳ 結果と考察

異文化間教育の観点から見て、定時制高校(X高校)は4つの点で再評価することができた。

1点目は、定時制高校(X高校)の教師生徒関係から見えてきた「教室を多様な生徒が集まる場、と捉える視点」と「一人の人間として対等な立場で生徒と共に学ぶ」という教員の姿勢が、生徒の主体的な学びを促進したり信頼関係を構築する上で必要とされるものと通じており、その点において肯定的に捉えることが可能だということである。

2点目は、Aさんが経験した「深い部分でわかりあえる」定時制高校における生徒関係は、特筆に値するものであったことだ。具体的には、他者を排斥するいじめなどの行動の軽減につながり、異質な他者との共存をはかっていく素地となっており、そして「生きているとは何か」等の深い部分での語り合いはローレン(1983)が日本の高校教育に不足していると指摘した「実存的な問い」と通じていたのである。

3点目は、定時制高校(X高校)の教員と生徒両者が培っていた「その人自身を見る力」だ。これは、多様化が進んだ社会において持つべき基本的姿勢であるとされており(横田2012)、本質的な意味での「グローバル人材」につながる力であると評価することができた。

4点目は、X高校の「多様性」に着目した際に「社会と近く」、「社会の縮図」である場だと生徒が定義づけたり、「るつぼ」と教員がX高校を表現していた点である。高校と卒業後の社会との接続をいうときに、社会的スキルを身につけたり職業観や労働観を養うことは大切なことであるが、その前提として必要な「色んな人がいるのだ」という学びを育てていたことは、人間社会との接続をしっかりとらえることができている、と評価できるのではないだろうか。

以上 4 点が、定時制高校 (X 高校) の教育の中でも、異文化間教育の観点から肯定的に捉えられると考えた論点である。

では次に、課題として見えてきた 3 つの点について述べたい。

1 点目は、生徒指導上の課題である。X 高校では、生徒が自分自身を見つめ直せるよう、教員が生徒一人一人に応じた対応をしたり、生徒の個を尊重するよう心がけていたが、それゆえに集団としての意識や規範が育ちにくいという現状があった。そして、生徒によっては個人の価値観が肥大してしまったり、自由であることをはき違えてしまうことがあり、それが課題とされていた。だがその課題は、生徒が自分を立て直した後に集団の中で役割を持てるよう働きかけることで、自分という存在や自分の考え・価値観を相対化でき、解消されるのではないかとということが A さんと B さんの事例から見えてきた。

2 点目は、進路指導上の課題である。X 高校では生徒が自分を見つめ直し、自分の軸を確立することに重きをおいていたが、その分卒業後の将来を考えることが十分にできなかったと卒業生である A さんと B さんは感じていた。そしてその点には、生徒が少しずつ立ち直ってきた段階から、卒業後の姿を具体的に描けるような働きかけをしていくことが重要なのではないかと考えられた。

3 点目は、生徒が抱える悩みに関する課題である。A さんと B さんのように、教員から「定時制高校という環境を生かして成長した」と捉えられる生徒であっても、定時制高校に入学した自分を「普通とは違う」と捉えており、「普通になりたい」という思いと「人と違っていただけで今の自分がある」という思いを持ち葛藤し続けていることがわかった。卒業後も生徒たちはこのような葛藤をもち続けて生きていくのだということを認識し、彼らが持つ思いに想像を巡らせることが大切であると言える。

以上 3 点が、本研究から見えてきた定時制高校 (X 高校) における課題である。

#### IV 提言

本研究では定時制高校を「多様性のある教育の場」と見なし、異文化間教育からの捉え直しが可能かどうかを考察し、定時制高校における生徒が自分を見つめ直し確立させることに重点を置いた教育は、グローバル化が進む現在の社会の中で必要とされる「多様性を基調とした自立・協働・創造 (文部科学省 2013)」につながっていることが見えてきた。そして、それは定時制高校だから必要なのではなく、周りと同じであることが暗黙の内に了解されがちである全日制高校でも必要なのではないかと考えられる。なぜなら、日本の教育振興計画で多様性を掲げていても、生徒自身が多様であることを肯定的に捉えられなければ徒労に終わってしまう可能性が高いからだ。本研究では学校にどのような制度や授業展開があれば実現可能かという点等についての考察には至らなかったが、渡部淳 (2007) が指摘するように、全日制高校の教室も多様な生徒の集まりと捉えて授業展開を行い、生

徒が多様な人がいる中での自分という存在を知り、「どう社会と関わっていききたいのか」という認識を育んでいくことで、「多様な人々との協働」を目指した教育が実現できるのではないか。この点において定時制高校教育は他の教育の場を良くする可能性があり、逆に、全日制高校教育の進路指導や集団としての規範を育む教育を定時制高校教育に取り入れることで、それぞれの教育の場がより良くなっていくことが期待できるといえるだろう。

#### 【論文要旨における引用・参考文献】

- 柿内真紀・大谷直史・太田美幸(2009)「現代における定時制高校の役割」『鳥取大学生涯教育総合センター紀要第6号』鳥取大学生涯教育総合センター,1-25
- 片岡栄美(1983)「教育機会の拡大と定時制高校の変容」『教育社会学研究第38集』日本教育社会学会, 158-171
- 川喜田二郎(1986)『KJ法—渾沌をして語らしめる—』中央公論社
- 塩野米松(2002)「塩野米松流 聞き書き術(第1回 森の“聞き書き甲子園”事前研修—平成14年8月27日 塩野米松先生の講義より)」『聞き書き研修テキスト事前学習用』  
<<http://www.foxfire-japan.com/program/tech01.html>>(2014年10月5日)
- 多田孝志(2006)『対話力を育てる—「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション—』教育出版
- 多田孝志(2009)『共に創る対話力—グローバル時代の対話指導の考え方と方法—』教育出版
- トーマス・P・ローレン著、友田泰正訳(1983)『日本の高校(Japan's High Schools)』サイマル出版会
- 文部科学省(2013)『教育振興基本計画』
- 横田雅弘(2012)「ヒューマンライブラリーとは何か—その背景と開催への誘い」『多文化社会の偏見・差別 形成のメカニズムと低減のための教育』加賀美常美代、横田雅弘、坪井健、工藤和宏編著、明石書店, 150-171
- 渡部淳(2007)『教師 学びの演出家』旬報社